『松浦宮物語』の「つきのころ」

――弁少将の恋と春の月・秋の月――

安道　百合子

はじめに

『松浦宮物語』は、舞台を唐と日本とにまたがらせ、天帝と阿修羅との戦いを背景にして人間界の戦いを描くという構想面においても、また軍記物語的戦乱場面が多いといった描写面においても、興味尽きない作品である。しかしながら、基本的には主人公弁少将と唐の母后および華陽公主との恋を軸とした恋愛物語である。さらに、琴の秘曲伝授というテーマも持っている。

そのなかで、小論では、弁少将の恋愛場面に焦点をあて、その表現技巧について考察を加えたい。弁少将は、巻一において華陽公主、巻二において母后（梅里の女）と交渉を持つ。華陽公主に琴の秘曲を習うその時は、「八月九月のつきのころ」であり、しかも五夜に限られる。また、母后との最初の逢瀬は一月の「月のころ」である。四年余りに及ぶ唐での生活のなかで、これらの「つきのころ」については、一日一日をきめ細かく語っていく作者の態度が見られ、「月」が舞台設定として重要に機能し、かつ、女人の象徴ともなっている。[1] それぞれの場面について、「つきのころ」という設定が、弁少将の心情をたくみに描き出し、恋愛場面を象徴的に描き出していることを確認したい。

一　華陽公主との恋

「八月十三日の月くまなくすみのぼりて」[2]「おもしろき」夜、弁少将は「ことなるめしなく」て参内しないでいた。が、「いとまある心地してれいのひとりながめふしたるに、心は三千里の外にあくがれて、すみなれしかたの恋しさも、いとどまぎるるかたなければ」供を一人、二人連れて「ゆくへもなく道にまかせて」外へ出る。そして「夜中ばかり」になろうとするころ、高い山の上の楼で琴を弾く翁に出会う。この翁は、既に弁少将を知っており、「人の国に琴のこゑをつたへひろむべきちぎり」について教えたのち、華陽公主に関して次のように語る。

かの公主は八月九月のつきのころ、かならず商山といふ所にこもりて、ことのねをととのへ給ふ。（二九）

この言葉によって、弁少将は華陽公主を訪ねて行く。さて、ここに言う「つきのころ」とは、具体的に何日を指しているのだろうか。

一般的に「つきのころ」と言えば、満月を挟んで前後数日、夕月夜を十分に賞美できるころを指していると思われる。『枕草子』初段に「夏はよる。月のころはさらなり」とあるのも、何日でなけれ

ばならないということはないだろう。しかし、『松浦宮物語』のこの場面に言われる「つきのころ」は、はっきりと定められるべきものではないかと思う。華陽公主は、「世になくもてかしづき給ふみこ」であるうえに、前世からの因縁で仙人より琴を伝えられるという、極めて特殊な境遇に設定されている。その華陽公主と弁少将とは「かならず」という言葉が端的に示すように、逆らい難い強い因縁によって、出会いそのものが約束されているのである。その華陽公主が、毎年「八月九月のつきのころ、かならず」こもるというのだから、その日も定められたものであろう。具体的に記事を追っていくと、八月は少なくとも十八日の朝まで、また、九月は十三夜から五夜、つまり十八日の朝までは商山にいたことが確認できる。八月十八日までは一日一日が詳しく語られているので、まずはそれを日を逐って見てみたい。

○八月十四日

くれもはてぬにいそぎいでて、ききしかたにたづねゆく。いみじきむまをいとどうちはやめつつ、夜中にもなりぬらむとみゆるほどに、おなじごとたかき楼のうへに、琴のこゑきこゆ。〈中略〉れいのふみつくりかはして別れなむとする時、「このこりのては、九月十三夜よりいつよになむつくすべき」とのたまふ。（三三）

○八月十五日

あけはてぬさきにといそぎかへれど、巳の時ばかりにぞ。〈中略〉こよひは便なげにのたまひつれど、かひなきながら、おはすらむさまをもいかでみむとおもへど、御かど月の宴したまひて、夜すがらあそびあかしたまふ。（三三）

○八月十六日

つぎの日もいとまゆるされず。まつはしくらさせ給ふ。雨いみじくふりて、心ぼそきたびねも、いまさらにおもかげそへるはげにあぢきなき身の思ひ也。（三四）

○八月十七日

からうじてあけゆく。つづみのこゑに、勅使いそぎきて、今日も御あそびあるべきよしいへば、日たかうみなまゐりあつまりぬ。心はそらにのみうきたちながら、さまざまあそびくらすに、れいのいとまゆるされず、よもあけぬ。（三四）

○八月十八日

かの公主は、けふぞみやこへかへり給ふ。（三四）

弁少将は、八月十四日に初めて華陽公主に会った。前の日、故郷を懐かしみながら宮中を出た少将は、当然かつての想い人である神奈備の皇女をも思い出していたであろう。しかし、思いがけぬ前世の因縁を知らされ、華陽公主に会う。会ってみると、彼女は神奈備の皇女など比べものにならないくらい美しい。翁に、決して乱れ心をおこすな、と禁じられていても、少将は一目で恋してしまったのである。その別れ際に、次は九月十三夜より五夜、と告げられる。この華陽公主の言葉から、彼女は九月十三日より五夜は確実に商山

にいることが知られる。弁少将はこの言葉によって、彼女のいる「つきのころ」を五夜と理解したのであろう。そして、「八月九月のつきのころ」と翁が言うからには、八月も同様に十三日から五夜の間いるに違いないと考えたのであろう。そのように考えると、この後に続く十五日以降の記事からは、なんとか八月の五夜のうちにもう一度会いたいと苦慮する少将の焦りの気持ちが読み取れる。

十五日は月の宴で、夜通し外出できない。十六日も出かけることができない。そのうえ雨まで降ってくる。商山は、日の暮れ果てぬころに出かけても「夜中ばかり」に着くところ、「あけはてぬさきに」と急いで帰っても「みの時ばかり」にやっと帰り着く、そんな遠い場所である。少将は出かける機会をしきりとうかがっているのである。が、帝は放してくれない。華陽公主が五夜滞在するのだとすれば、あと一日しか機会はない。その焦躁が十七日の朝の「からふじてあけゆく」に表れている。「からふじて」の語は、この物語ではここに一例存するのみで、ようやく商山に出かけられるこの日を待ちかねた少将の心情が読み取れよう。しかし、またしても機会は失われる。勅使が「今日も御あそびあるべきよし」を伝えてきたからである。「日たかうみなまゐりあつまりぬ」とある。通常は夜行われる宴が昼から催されることにより、少将の外出は確実に不可能になったことを意味する。すなわち、彼の外出を許さない状況が確実に設定されているのである。「そらにのみうきた」つという少将の心は、華陽公主に会いたいその一事に集中していたと思われる。

翁の言った「八月九月のつきのころ」は十三日から十八日までの五夜である。このように限定された期間を設定し、さらに朝夕時間を追って語っていく語り口によって、弁少将の焦躁感と高まる恋情とが切実に表現されていると言えよう。

ところで、結局九月を待つほかなかったその間のことは「ただの給しほどをまちわたるに、はかなくすぎて九月十三夜にもなりぬ」と語られるにすぎない。それまでのきめ細かさとは実に対照的である。が、少将がただ十三夜を待つばかりで他のことには身が入らずに過ごしたであろう空虚な日々を実にうまく語っていると思われる。

弁少将は「ちぎり」という自らの意志に関わらない因縁によって、翁の予言通り華陽公主に会った。弁少将は一目で恋に落ち、翁にいましめられている「みだれ心」を禁じ得ない。その思いは「つきのころ」という制約を受けることでさらに燃え上がる。予言に導かれ、戒律を課せられ、制約を受けることでさらに燃え上がる弁少将の恋情は、華陽公主の恋情を伴ったとき、予言を覆し、戒律を犯し、制約からとき放たれることによって成就する。

華陽公主との逢瀬が実現するのは十月三日である。この日、弁少将と華陽公主とは、ともに恋情に抗しきれず、そして禁を犯したために、華陽公主は命を失うこととなる。この日の月は夜更けを待たずに入る。「くらき夜のそらをひとりながめ」て琴をひく華陽公主の姿は、戒律を破った恋する女の哀しさを一層際立たせているようでもある。

二　母后との逢瀬

物語はその後、戦いの世を描きはじめる。文皇帝の死後、反乱軍が蜂起し、弁少将もいやおうなく官軍の一員としてその戦いにまきこまれる。敵方は勇猛な宇文会を筆頭に到底かなわないと思われる武力を持っているが、母后の軍略と神仏の加護とに助けられつつ、弁少将は果敢に立ち向かう。というより、立ち向かわざるを得ない。結果、宇文会を倒すに至って、彼と母后との絆は確実に深まっていったように見える。ようやく落ち着いて平和な宮廷が戻ってきたとき、物語はふたたび恋愛物語の風情をただよわせる。新しい年を迎えて最初の弁少将と母后との対話が描かれるのは、一月十四日の夜である。

月はなやかにさしいでてをかしき程に、后もすこしけぢかくおはしますほどに、（六五）

ここで、后は涙を流して、弁少将の功労に対して深い謝意を述べる。そのなかに「をしき月日のすぎゆく別れを、いましばしとだにとどめぬなむ、いとかなしき」とあるのは、后としての体面を保ちつつも、弁少将との別れを惜しんでいることを率直に語っている。弁少将も動じないはずがない。「すくよかに奏しなせど、心のうちはさまざまみだるらむかし」とある。「此国人にみだるるふしなく」（唐の女性に心ひかれることなく）過ごしてきた弁少将も、華陽公主にだけは乱れ心を起こしてしまったことが既に語られている。その「みだれ心」をいままた后に対して禁じ得ないのである。かつて、華陽公主が商山にいる「つきのころ」、毎日、彼女のことばかりを想って心を悩ませたように、ここでも、彼の心は惑い続ける。その日の夜は「うちもまどろまれず」「あやしう思ひつづけらる」という状態である。そして、あくる十五日。

例の、あくればいそがしうまゐりぬれど、一かたならぬながめのみせられて、あさ政はてぬれば、例のふみなど講ぜらるれど、けふはかさねてたづねとはることなくて、后いらせたまひぬれば、いとまある心ちして、とくうちやすむ。（七二）

華陽公主とは会えないつらさが強調されていたが、后とは参内すれば会うことができる。けれども、それは后としての彼女であって、書物を講義するという務めのために対面するだけのことである。満たされない弁少将は「夕べのそらにながめわびて、なにとなくあくがれいで」ることとなる。

その夜、彼は思いがけず梅里の女と契りを結ぶ。「かほもさだかにみえず」「いらふること葉もな」いような、正体不明の女である。「けはひ」と「かをり」のなつかしさだけが印象深く描かれ、辺りに満ち満ちた梅の香とともに夢幻的な場面を作り出している。そして朝を迎え、少将は退出する。例の如く参内して后に対面した彼は、「けぢかき御けはひの、たぐひなくうつくしきはさるものにて、いふよしなかりつるてあたり、人の程、あやしきまで思ひよそへらるる」。弁少将にとっては、あくまで、誰とも知れない女との不思議

な逢瀬であったが、后を見ると、その女に不思議なほど思い合わせられるのである。

ここに、后ではなく、梅里の女との逢瀬を描いたことの意味は大きかろう。后と弁少将との恋はもともと身分違いの恋であるにとどまらず、後に后自身の口から明かされる天帝の定めにも定められていない恋であった。すなわち、「后」である女性が弁少将と逢瀬を持つわけにはいかないのである。

三　月に象徴される女性

ところで、初めて弁少将の目に映った華陽公主は月にたとえられていた。

いひしにかはらずえもいはずめでたき玉の女、ただひとり琴をひきゐたり。〈中略〉あてになつかしう、きよくらうたげなること、ただあきのつきのくまなき空にすみのぼりたる心地ぞするに、（三一～三二）

また、この日の別れ際の彼女は、かぐや姫さながら、月をながめる姿が印象的に描かれている。

公主もいたう物をおぼしみだれたるさまにて、月のかほをつくづくとながめたまへるかたはらめ、にるものなくみゆ。（三三）

こうした描写は、母后にも通じるものである。巻二の一月十四日の母后は次のように描かれる。

十四日の月の雲まをわけてすみのぼる空を、つくづくとながめたまへる御かたはらめぞ、なほにる物なくきよらなる。（七一）

また、弁少将から彼女らへの贈歌には、彼女らを月にたとえた表現が見える。九月十三日、華陽公主との別れ際の歌。

よしここに我がたまのをはつきななむ月のゆくへをはなれざるべく（三六）

そして、別れてもまたその夜の来るのが待たれて、近くの山陰で日を暮らしながらの歌は、

おほぞらの月にたのめしくれまつと山のしづくに袖はぬれつつ

一方、母后に対しても、

はてもなくゆくへもしらずてる月のおよばぬ空にまどふ心は

と歌いかける。

華陽公主も母后もともに月にたとえられるが、それは、手のとどかない崇高さの象徴でもある。弁少将が梅里の女と契りを結んだ一月十五日の夜、彼はかつての華陽公主との逢瀬を回想する。

かれはただそらゆく月の心地して、この世のことだにおぼえざりしを、これは世をしらぬにもあらず、物なれけぢかき気はひの、なつかしうらうたげなること、又たとへていはむかたもなし。（七五）

いまここで逢っているのは、誰とも知らない女である。その気安さが、「そらゆく月」のような華陽公主と比較され、こうした表現になっているのであろう。この女性が后であることは、この時点の弁少将には思いもよらないことである。弁少将にとって、相手が后

であるかぎり、身分の違いを超えて逢うことはできないが、ここでの相手はあくまで謎の女であるから、こうして、比較的自由に、あたかも遊女に接するような親しさで逢うことができるのである。

それは華陽公主との逢瀬が闇夜に設定されたことと無関係ではあるまい。もともと弁少将の渡唐の背景には、二つの因縁が関わっている。一つは、かつて陶翁の予言にあった「人の国に琴のこゑをつたへひろむべきちぎり」であり、もう一つは天帝が定めた「らんをゝさめ、国をおこすべき御つかひ」の手助けを天童の生まれ変わりとして務めることである。この二つの、言わば、弁少将の意思にかかわらない務めを果たすために、彼は、二人の女性と接することになるわけである。従って、「月」にたとえられる二人の女性との交渉は、二つの因縁に沿ったものでなければならなかった。しかし、彼らはそこに、人間であるが故の「みだれ心」という心の動きを禁じ得なかったのである。その禁じ得なかった心の動きを表現するために、「月」にたとえられる華陽公主との逢瀬には月の沈んだ闇を設定し、一方の母后との逢瀬には彼女自身が「月」でなくなる、つまり謎の女となる設定を持ち込んだと考えることができるのではないだろうか。

后が「后」として逢うことは、后に与えられた役割の外のできごとである。華陽公主が「みだれ心」に負けて犯した罪のように、母后にとって弁少将への恋は予定外のことだったはずである。さらに、后は、自身が第二天の天衆であり、天帝に定められた務めによって人間界に下っていることを自覚している。だからこそ、華陽公主のように自分の姿を変えずに逢うことはできなかったに違いない。月夜の逢瀬が「后」ではなく梅里の女としてであったのは、それが秘められるべき恋であったからである。のみならず、后が自分の務めをはなれてただの女になるために必要な設定だったと考えられよう。

「月」にたとえられる女性たちは、月光に照らされて美しく読者の前に姿を見せる。それは彼女たちの表の顔であり、因縁に逆らわない姿である。華陽公主が月のもとで琴の秘曲を伝えたのは「ちぎり」のためだった。が、彼女の恋は月のもとで行われるべきものではなかった。后が弁少将の助けを借りて阿修羅の化身を倒すことは天帝の定めたことだった。が、彼女の恋は定められていなかった。というように、物語は、天界の者を人間界に下ろすことで、予期せぬ恋愛をさせ、その恋を満ち欠けする月に象徴させて描いているのではないだろうか。

おわりに

梅里の女との夢のような一夜の後、弁少将の心は千々に乱れる。何の手掛かりもないはかない逢瀬ゆえに、月を見てはかの「つきかげ」を思い起こし、悲しむばかりである。

二月、弁少将はいつものように月を見ては憂い、歌を詠む。

いつとなく月こそものはかなしけれはると秋とのあらぬ光に

春の月、秋の月は、ともに歌材としては憂いをさそう常套的なも

のかもしれない。しかし、ここに彼のもの悲しさをさそう春の月、秋の月とは、二人の女性の面影を重ねたものと見ることができるのではないか。月を見て、まずは梅里の女との月夜の逢瀬を思い浮かべよう。春の月夜であった。さらに、華陽公主から琴の秘曲を学んだ秋の月夜を思い起こすだろう。彼の手元には、「ころものたま」が残されており、華陽公主を忘れようはずはない。春の月は何者かわからぬままで、秋の月はもう消えてしまった。そうして、弁少将の憂いは増すのである。

母后に運命の種明かしをされる前の弁少将にとって、彼の恋はまさに月に想いをかけるような頼りないものだったと言えよう。

［註］

（1）　この物語における月については、萩谷朴氏訳注『松浦宮物語』（角川文庫）脚注に「作者定家は月の光の効果の下に男女の恋愛感情のゆらぎを演出することを常套手段としている」（六五）と指摘されているほか、秘曲伝授説話の要素としての指摘や、古今調・新古今調の美の要素としての指摘などがある。

（2）　本文の引用は基本的に前掲角川文庫本により、同書の頁数を示した。ただし、句読点・清濁等を私に改めたところがある。

（あんどう・ゆりこ、旧姓　渕野）
――広島大学大学院博士課程後期在学――